

# 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Gestational body weight gain and risk of low birth weight or macrosomia in women of Japan: a nationwide cohort study

和文タイトル:

日本人女性における妊娠中の体重増加量と低出生体重児、巨大児との関連

ユニットセンター(UC)等名: 甲信ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: International Journal of Obesity

年: 2021 DOI: 10.1038/s41366-021-00947-7

筆頭著者名: 内沼 裕幸

所属 UC 名: 甲信ユニットセンター

目的:

日本人女性における妊娠時期ごとの適正な体重増加量について、低出生体重児と巨大児、妊娠高血圧症候群との関連を解析することによって検討する。また妊娠時期ごとの体重増加量のパターンについても、同様に検討する。

方法:

エコチル調査参加者のうち、流産・死産、多胎と出生体重のデータが不足していた者を除いた 98,052 名の妊婦及び生まれた子どもを解析対象とした。対象者の妊婦を妊娠前 BMI で 5 群に分類し、さらに妊娠時期ごとの体重増加量を 6 群に分類し、それらと低出生体重児、巨大児の出生、妊娠高血圧症候群の関連について多項ロジスティック回帰分析を行った。また、妊娠時期ごとの体重増加量のパターンについて解析を行い、さらに生まれた子どもの 3 歳までの BMI について解析を行った。

結果:

妊娠初期から妊娠中期までの体重が増えないこと、また妊娠中期から出産時までの体重増加量が 2kg 未満であることは、低出生体重児の出生と関連していた。それまでの体重増加量に関係なく、各妊娠時期の体重増加量は低出生体重児と巨大児の出生と関連していた。低出生体重と巨大児の出生に関連しない体重増加量は、妊娠高血圧症候群の発症とも関連していなかった。また、出生時の体格は 3 歳時の体格に影響することが示された。

考察(研究の限界を含める):

厚生労働省のガイドラインでは、妊娠期間全体の体重増加量と 14 週以降の週ごとの体重増加量の 2 つについて推奨値が示されている。しかし BMI が  $25\text{kg}/\text{m}^2$  以上(過体重)の妊婦に対してはこれまで推奨値がなく、本研究で新たな推奨値を示すことができた。加えて、本研究では、妊婦自身が妊娠期間全体の体重増加量を重視しており、妊娠中期以降に限ってみると体重増加量が不足または過剰になる可能性も示された。しかし、どの BMI カテゴリーでも、妊婦自身が総体重増加量を重視しすぎると、低出生体重児や巨大児の出生につながる可能性が示された。本研究の限界として、各妊娠期での調査のタイミングが個人で異なること、体重増加量に対する介入の影響を示すものではないこと、等がある。

結論:

日本人女性における低出生体重児または巨大児の出生、妊娠高血圧症候群の発症は、妊娠期間ごとの体重増加量と関連していることが示された。また、妊娠期間を通じた体重増加量の目標を達成するために妊娠中期以降の体重増加量を調整することが、低出生体重児や巨大児の出生に影響を与えることが示唆された。